

」の理念とした点では、Grotfahnらの理解の範囲を超えては
いかなかった。

暉峻は、社会衛生学の学的理想の追求のために「民族衛生 (Rassenhygiene)」を重視した。それは、社会衛生学が経済的および社会的条件を改善することを通じて社会衛生の目的である衛生的文化の普遍化を達成すべきであるという前提のもとで、その経済的・社会的条件の変化が急激には望めないことを代替するために、優生学という方法に高い評価をなすことにより類似の成果を得ようとの論理であったとみられる。

國崎は、社会衛生学は社会が「對立的な階級に分れて居り、その一方の階級が社會經濟的に常に劣位に居り、しかもその数が極めて大多数の人間をば包括するやうな社會の現段階」においては、社会的に劣位にある階層の諸問題を社会衛生学上の主要課題とする必要があるとし、社会衛生学は「無産者の衛生学」であると主張している。

この代表的な三著の相違が、日本における社会衛生学の受容態度の多義性を示している。

(大阪大学医学部公衆衛生学教室)

46 明石博高にみる「衛生」政策

小野 尚香

衛生というものが社会化され政策の中に組み込まれたのは、近代という時代の必然と考えるべきであろうか。京都では、明治の早くから衛生が近代化政策の中に活用され、社会形成をなしていく一端を担った。その発議者であり遂行者が明石博高であった。

明石は医師であり薬剤師であった。彼は明治三年十月、時の権力者である榎村正直の要請に応じて京都府に出仕した。『明治文化と明石博高翁』には、明石が公私ともに京都の殖産、教育、福祉、そして衛生政策に携わっていたことが記されている。社会面では、駆黴院、療病院、医務取締制、童仙房開墾、集書院(図書館)、温泉施設、アポテーキ、官立司薬場、癲狂院、避病院、観象台(測候所)であり、産業面では、勸業場、舎密局、博覧会、伏水

製作所、牧畜場などであった。

後進国の政治的方向は、強力なりーダーたちの意図にあり、京都においても政治的形成は、明石をはじめ横村、山本寛馬の手に実質上委ねられていた。明治維新、遷都によって流民が町に溢れ、衰退する京都の現実の中で、三者の目的は欧化政策を機軸として京都の再興を計ることであった。開明的な目標と絶対色の強い方法という二重構造の中で救貧勸業政策が実施され、近代管理社会が形成されようとしていた。その中で明石の推奨する衛生が政治的役割を担っていったのである。

明石の指向したものは、彼が提出した舎密局、療病院、癲狂院関係など種々の建議書や事務文書から分析することができる。それによれば、彼は西洋医学に基づいた衛生行政機構を整え、最先端の西洋医学教育を行い、医療従事者の向上と組織を確立し、窮民対策を含む疾病の予防と治療を通して、京都の興隆と府民の健康保持いわゆる富府健民を図ろうとしたのである。

すなわち、彼はそれまで民間ベースで行われていた衛生事業を府の政策に組み込み、医療・衛生施設の財源は、基本的に府民の税金、醸金によるものとした。また療病

院を中核とする管理システムを形成することによって、衛生行政施策を円滑に推進しようと試みたのである。療病院設立を審議したのは明治四年二月であった。その創設と平行して医業者の調査を行い、各地域毎にその代表者を公選し、人的ネットワークを形成して、頂点に療病院をおいたのである。

さらに寮病院では、ドイツ人教師を招き、病理解剖を取り入れ、最新の医学教育によって医療従事者の養成を試みた。さらに脳脊髄膜炎、チフス、コレラなどの予防法を記し、また医療従事者にその予防と対処についての教育を施した。衛生政策の体系は伝染病の予防と対策、精神病院、温泉療養施設にも及んだ。明治十年のコレラ流行時の「クワランタイン」政策は有名である。

このような衛生行政機関のネットワークは、京都の名望家を中心とした人脈をもとに、各々の分野でのオーソリティの起用や税金、醸金、寄付金の財政的裏付けによって支えられた。より科学的な方法と詳細にわたる規則を起草、制定することによって、画一的な衛生施策の提供と府民への浸透を可能にしたのである。中央が明治七年に布達した医制が訓辞的色彩の濃いものであったため、

京都独自のものがその時代に誕生した。

明石の科学者としてのアイデンティティは、蘭方に通じた家庭に育ち、慶応元年恩師である新宮涼閣らと興した医学研究会での勉学や鉱泉の調査、慶応二年自宅で開いた理化学研究会の活動、明治二年薬局主管兼看頭として勤務した大阪の仮病院でボードウィンに、また大阪舎密局でハラタマに従事した経歴にみられる。また医師としては、明治維新時に医学研究会の仲間とともに開設し医務にも携わった病院での奉仕や、明治三年梅毒の蔓延を防ぐための療病館を設置し、ボランティアの医者を求め、祇園の力樓主杉浦治郎右衛門らの財政的協力を得て、娼妓の疾病治療と検梅を実施した行動からも窺える。

明治三年、三十二歳の明石は京都府に出仕し、勸業政策と平行して衛生政策を遂行していった。彼の科学者としての知識と合理性、医療に携わるものとしての使命感に基づいた政策は、人々の命と生活を守ることに加え、彼が政策化した殖産興業への労働力育成にもつながるものであった。明石の企画した衛生という文明開化政策は、近代京都の社会形成的機能を担っていったのである。

(大阪大学医学部)

47 結核外科における肋膜外合成樹脂充填術

藤倉 一郎・藤倉 知子

明治三十七年以来、わが国における結核の死亡率は人口一人あたり二〇人に達し、結核患者は一五〇万人におよぶと推定された。欧米では老人の病気となっていたのにわが国では青年の病気であり、一五―三〇歳で発病そして死亡という経過をたどった。

このような状況のなかで昭和十年代に肺虚脱療法として人工気胸術、あるいは横隔膜神経捻除術が盛んに行われていた。しかしこれらの療法では僅かに二五%くらいが軽快するにとどまった。そのため外科的に胸郭形成術が行われるようになった。これによって就業可能率はいちじるしく改善した。加納保之によれば、昭和二一年までに施行した胸郭形成術は三六四名で、手術死九名、その他の死が四六名、現在療養している者が九三名、就